

古書のたのしみ（令和八年二月）

土屋 博

一「今古名家詩文 下」愛媛縣士族近藤元粹編輯

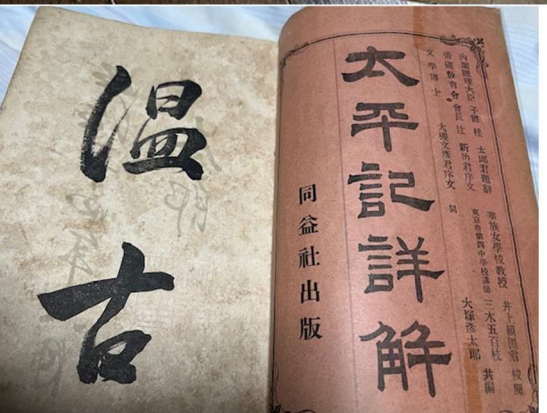
（出版人大阪府平民松村九兵衛・森本太助、明治十一年出版、三二丁）

古書價格五百圓也。菅茶山、頼山陽、廣瀬淡窗、藤井竹外、大槻磐溪など。

二「太平記詳解」全五冊

（同益社出版、明治三十四年刊、五冊正價三圓五十錢）

古書價格二千五百圓也。故愛甲次郎先生は、文語教材として「太平記」を高く評價せられ、今日殆ど顧みられぬことをかれ給ふ。本書は、明治時代の獨學者用の「太平記」の参考書として、周到なるものなり。保存状態も極めてよし。内閣總理大臣子爵桂太郎の題辭は「溫古」なり。



三「歸雁の蘆」新渡戸稻造著

（弘道館、明治四十一年三月七版、正價金壹圓、本文三〇二頁）

古書價格六百圓也。初版は明治四十年十二月。二重函入。何度目かの購入なれど、二重函入

は初めてなり。また、歸雁の蘆の繪、student days abroad の副題は極めて貴重なり。
新渡戸稻造（一八六二年生れ、一九三三年歿）については、その主要著作につき解説したるもの、文語の苑ホーム頁に掲載したれば、興味ある方には御覽頂きたし。氏の留學記は現代人にとりても教へらるること多々ありと信ず。
函の裏に印刷せられたる東京朝日新聞の書評に曰く、「新渡戸博士の近著なる本書は、博士が歐米の兩地留學中に感じたる事又は起りたる事を書き綴りしもの、世界的の徒然草と云ふて可ならんか。博士の學識と才能に就ては世既に定評あり。去れど其德操の美と俊爽の風に至りては未だ多く人に知られざるが如し」と。



四「現代名家 明治文粹」前文部大臣。長谷場純孝閣下題字、玉井紅葩編著

（文陽堂、大正二年刊、定價八十錢、四〇八頁）

古書價格三千二百圓なり。福澤諭吉「國家の貴きを論ず」、森鷗外「初の夜」、井上毅「支那史を讀む」、幸田露伴「身の上ばなし」、徳富蘇峰「故郷春色今若何」など。大正の初め頃にはかかるアンソロジー數多出版せらるるも、本書は久保天隨編「現代名家文選」、「明治百家文選」、岡田正美編「明治時代文範」、大町桂月編「文章大觀」などと並び、特に秀でたるものの一つといふべし。

五「瀧口入道」高山樗牛著

（春陽堂、大正九年九月七十五版、二四七頁）

古書價格千圓也。初版は明治二十八年。

七十五版を重ねたるは、一世を風靡したる當時のベストセラーの證しなるべし。

文語の苑制作のユーチューブに熊澤南水先生朗讀の「瀧口入道」シリーズあり。本書を片手に鑑賞せらるれば、理解の一層深まること必定なり。

六「國學者著述一覽」國學院大學教授・文學博士植木直一郎序、關書院編輯部編

（關書院、昭和七年刊、定價金貳圓、本文三一七頁）

古書價格千圓也。赤尾可官（よしたか）、秋元安民、僧亞元より、度會（わたらひ）延佳、渡中秋まで。

七「特別展生誕百五十周年記念 維新の先覺 吉田松陰」山口縣教育委員會編

（山口縣教育委員會、昭和五十五年刊、一四九頁）

古書價格三百圓也。松陰の直筆書狀の寫眞多數を收録す。

八「維新の先覺 吉田松陰」山口縣立山口博物館編

（山口縣教育會、平成二年刊、二〇〇

古書價格三百圓也。前掲書とほぼ同趣旨の書籍なるも、内容は一層充實し、直筆の書狀等には判讀活字も添へらる。

九「圖說 太平記の時代」佐藤和彦編

（河出書房新社、平成二年十二月刊、定價千六百圓、一三五頁）

古書價格二千二百圓也。平成三年のNHK大河ドラマ「太平記」に便乗したる、出版かと思はるれど、寫眞滿載にて、「太平記」の概略を理解する相應しき書かと。編者の佐藤和彦氏は一九三七年生れ、早稻田大學博士課程修了、東京學藝大教授。

十「太平記を読む」佐藤和彦著

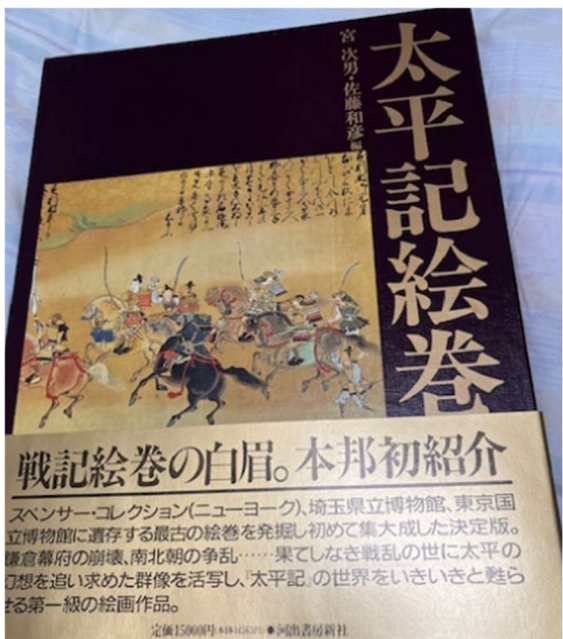
（學生社、平成三年刊、定價千七百圓、二一九頁）

古書價格五百圓也。平成三年春朝日カルチャーセンターの講演ノートを基とす。

十一「太平記繪卷」宮次男・佐藤和彦編

（河出書房新社、平成四年刊、定價一萬五千圓、二五三頁）

古書價格二千二百圓也。函入。戰記物語の白眉を本邦初紹介するもの由。特にニュートーカーのスペンサー・コレクションは壯觀なり。後醍醐天皇の隱岐脱出を知らせる早馬の場面など。外國人に人氣の圖柄とはいへ、海外流出、大いに惜しまるる處。



十二「特別展圖録 太平記繪卷の世界」

(埼玉縣立博物館、平成八年刊、

古書價格千二百圓也。一九九六年十月より十二月まで埼玉縣立美術館にて開催せられたる特別展の圖録なり。

十三「袖珍版 芭蕉全句」堀信夫監修

(小學館、平成十七年三刷、定價千二百圓、三〇二頁)

古書價格六百圓也。凡例に曰く、松尾芭蕉集全發句(小學館刊)をマザーとし、携帯と利便性に主眼を置きたるものなりと。制作年代順に配列せられ、一六六三年「月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿」(明るい月を道案内に手前どもの宿にお泊りください)より、元祿年間(自一六八八年至一七〇四年)の「前髪もまだ若艸の匂ひかな」(能役者の扇に請われた畫贊句)まで。

十四「三宅雪嶺が書いた『序』明治編」

(流通經濟大學三宅雪嶺記念資料館、令和二年刊、一〇五頁)

「三宅雪嶺が書いた『序』大正・昭和編」

(流通經濟大學三宅雪嶺記念資料館、令和四年刊、一〇五頁)

古書價格千圓也。序は雪嶺の最も得意とする分野なり。

「近世名人達人大文豪」(昭和三年講談社)の序に曰く、「性格で重きを置かるるは頼山陽とする。その性格が眞に稱揚すべきかどうか別として後に人好きのするやうなところがある。明治維新の變革も携つて居り、息子の三樹が斷罪に處せられたところもあらう。・・・何人が最も天分に富むかは、ただ圍碁に於て最も明白、他は何程か人々の好き嫌ひに委さねばならぬ」と。

(令和八年三月二十三日受附)